

貞山堀発掘調査報告書

—五間堀川災害復旧事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2017年2月

岩沼市教育委員会

貞山堀発掘調査報告書

—五間堀川災害復旧事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—

例　　言

1. 本書は宮城県岩沼市寺島地内外に所在する貞山堀の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、東日本大震災で被災した五間堀川の護岸施設及び排水施設である樋管の改修に伴い、事前の記録保存を目的として実施されたものである。
3. 調査は、岩沼市が平成 27 年 2 月 3 日から平成 28 年 12 月 12 日にかけて実施し、岩沼市教育委員会生涯学習課が調査を担当した。調査対象面積は計 150 m²である。
4. 発掘調査における測量業務については、株式会社バスコが岩沼市教育委員会の委託を受けて実施した。
5. 図面整理及び報告書作成については、平成 28 年 10 月 1 日から平成 29 年 1 月 31 日まで、岩沼市文化財整理室にて行なった。
6. 本書の調査地点名は、樋管名称ではなく、現地調査時に南方より付したものを使用した。
7. 本書の執筆・編集は、生涯学習課内での協議の上、川又隆央、熊谷篤が担当した。執筆分担については下記のとおりである。

川又 第 I 章、第 II 章 3、第 III 章、第 IV 章　　熊谷 第 II 章 1・2
8. 発掘調査及び資料整理に際し、次の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して感謝申し上げます（五十音順・敬称略）。
- 千葉 宗久（岩沼市文化財保護委員会） 宮城県教育庁文化財保護課 宮城県仙台土木事務所
9. 本報告書における遺構挿図等の指示は次の通りである。
 - (1) 縮尺は図に示すとおりである。
 - (2) 土層及び土器の色調は「新版標準土色帖」（小川・竹原：1973）に拠った。

【調査参加者（五十音順）】

塩谷 信幸　　草薙 敏宏　　齊藤 新彌　　武内 和彦　　渡辺 幹雄

目 次

第Ⅰ章 東日本大震災による岩沼市域の貞山堀の被害状況	1
第Ⅱ章 遺跡の概観	
1. 位置と地理的環境	8
2. 岩沼市の遺跡と歴史的環境	8
3. 岩沼市域における貞山堀の沿革	8
第Ⅲ章 調査に至る経緯と調査方法	
1. 調査に至る経緯	8
2. 調査経過	8
第Ⅳ章 調査成果概要	
1. 石積護岸地点の調査成果	10
2. 各橈管地点の調査成果	15
第Ⅴ章 まとめ	
報告書抄録	15

第Ⅰ章 東日本大震災による岩沼市域の貞山堀被害状況

宮城県の沿岸部には、阿武隈川の河口である岩沼市に端を発し、塙釜市牛生までに至る総長約33kmの「貞山堀」が存在する（註 現在は仙台市蒲生地区周辺で仙台新港建設の際に埋め立てが行われており、全区間で開通していない）。この貞山堀は現在の海岸線から約0.5km内陸側で、ほぼ海岸線に沿うように開削されたものであり、当市域に属する区間のうちの中央から南部にかけては左岸堤防上の松並木が水面に映える風光明媚な文化的景観を保っていたことが広く知られていた。

平成23年（2011）3月11日午後2時46分に発生した東北地方太平洋沖地震に伴う大津波によって、岩沼市東部地区は多数の人命をはじめとし、人家や農地にも多大な被害を及ぼした（岩沼市2011）。この津波はまた、阿武隈川や五間堀川などの河川護岸施設、及び排水施設にも甚大な損傷を与えたほか、地盤沈下を引き起こしたことにより各所で排水路が損壊し、内陸側からの排水についても機能不全に陥った。海岸線に並行して走る貞山堀についても、震災当初は津波が沿岸部に存在していた相野釜、藤曾根、二野倉、長谷釜、蒲崎、新浜の6集落に襲来したことから、建築部材をはじめとする大量の瓦礫が流入したほか、1箇所の破堤被害をはじめとし、橋梁部などを中心とした護岸施設、東側の後背湿地からの排水のために設置されていた樋管の損壊が各所で見られた。このほか、貞山堀の代表的な景観の一つとして親しまれてきた松並木についても、流失あるいは津波後の塙害によって枯死するものが相次ぐこととなり、景観の保全、回復が復興事業の中でも課題のひとつとして取り上げられている（宮城県土木部2013）。



写真1　震災前の貞山堀の景観（平成23年2月21日撮影）



写真2 藤曾根地区 右岸堤防の損壊状況



写真3 二野倉地区 真羅の流入状況



写真4 寺島地区 左岸堤防松並木の枯死状況



写真5 薩崎地区 左岸堤防の被災状況



写真6 新浜地区 左岸護岸施設の損壊状況



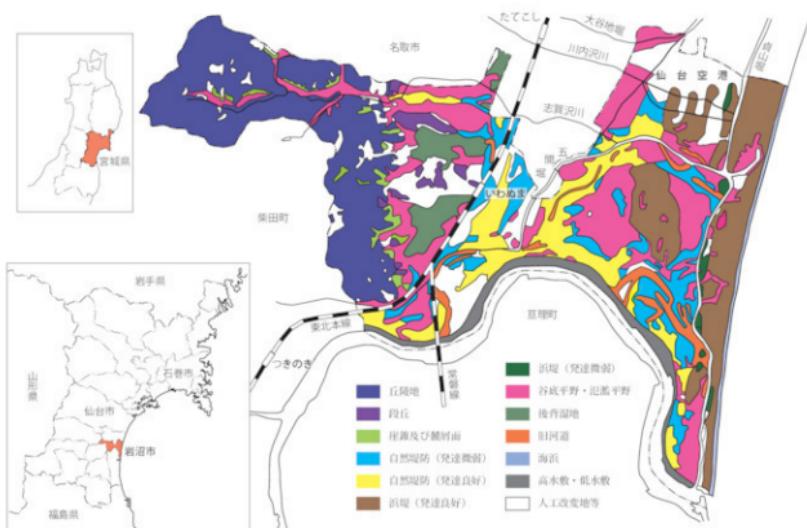
第1図 岩沼市内における貞山堀の被害状況

第Ⅱ章 遺跡の概観

1. 位置と地理的環境（第2図）

岩沼市は宮城県南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と接する。市域の南端を東流する阿武隈川は、栃木県と福島県を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内6位の239km、流域面積は5,400km²を測る。また、本市は古来より、柴田郡からの街道と亘理郡からの街道が合流する地点として知られるが、現在でも国道4号と同6号、JR東北本線と同常磐線の結節点となっており、このことから交通の要衝と呼ばれている。

市域を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に延びる岩沼西部丘陵（標高100～300m）と高館丘陵（標高200～300m）、これらの丘陵から東へ舌状に張り出す標高10～30mほどの長岡丘陵、二木・朝日丘陵と呼称している小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は仙台平野南部域に相当し、岩沼西部丘陵の東縁から太平洋までの間に約8kmの幅をもって発達する。この沖積平野は阿武隈川をはじめ、五間堀川・志賀沢川などの中小河川の堆積作用によって形成され、その沿岸には自然堤防が顕著に発達している。本報告対象遺跡は、仙台平野沿岸部海岸線に沿って発達する、複数の小浜堤列群で形成される第三浜堤列上および堤間湿地にかけて位置している。



第2図 岩沼市の地形分類図

2. 岩沼市の遺跡と歴史的環境（第3図）

岩沼市域では、現在のところ、縄文時代から近現代にかけての遺跡が67箇所確認されている。近年、東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査や、平成23年（2011）から平成26年（2014）にかけて行われた、岩沼市史編纂編集専門委員会考古部会における学術調査（以下、市史編纂事業）により、地域の歴史を解明するための新たな成果が報告されている。以下に、これまでの発掘調査などによって得られた知見について時代順にその概略を記す。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、市域西側の丘陵部に点在し、晚期の遺物が多量に発見された下塙ノ入遺跡【15】など、特に志賀沢川流域の志賀・小川地区にまとまって分布している。また、沖積地を臨む丘陵上に立地する山畑南貝塚【10】や畠堤上貝塚【36】では、汽水域に生息するヤマトシジミを主体とした貝層の形成もみられる。

北原遺跡【8】では、平成4年（1992）の県道改良工事に伴う発掘調査の際、中期後葉の土坑が50基近く検出され、曲線的な磨消縄文を特徴とする土器のほか、石錐や石棒などが発見された。

鶴ヶ崎城跡【24】では、平成16年（2004）の宅地造成に伴う第4地点の発掘調査において、土壘下に埋没した遺物包含層から、鶴ヶ島台式や梨木畠式に比定される早期末の土器群が見つかっている（岩沼市教育委員会2005、岩沼市史編纂委員会2015a）。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、縄文時代と同様、市域西側の丘陵部に多く分布している。しかしながら、上根崎遺跡【30】や朝日古墳群【37】、平野部に位置するかめ塚西遺跡【3】でも土器の散布が認められるなど、人間の営みが徐々に太平洋側へ拡大する様子をうかがい知ることができる。

鶴ヶ崎城跡【24】では、平成16年（2004）の発掘調査において、中期後葉と考えられる堅穴住居跡や、十三塙式に比定される土器および石包丁などの石器が発見されている。

北原遺跡【8】では、平成23年（2011）の市史編纂事業に伴う試掘調査において、堅穴住居跡から表面に特殊な撻糸文を施した土器が見つかっている。この土器は北関東を中心に分布する十王台式に平行するものとみられ、年代は後期後半と推量されている。また、杉の内遺跡【7】でも同様に試掘調査が行われ、ここでは中期中葉から後期にかけての土器が複数出土している。過去に耕痕のある土器も採集されている。

岩沼市域における弥生時代の考古資料は近年徐々に蓄積されつつあるが、墓や水田跡など、葬送や生産に関わる遺構は現在も発見されていない（岩沼市教育委員会2005、岩沼市史編纂委員会2015a）。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、高塚古墳、横穴墓、集落跡などが市内各所にみられ、市域東側の玉浦地区でも遺跡の存在が認められる。

高塚古墳のうち、県指定史跡のかめ塚古墳【2】では、平成24年（2012）の市史編纂事業に伴う発掘調査において、土師器や須恵器といった遺物のほか、周溝の底面から一本二又鋤が出土した。

また、顕在する全長約39mの墳丘は後世に削られたものであり、本来は全長約48mを測る前方後円墳であったと推定されている。造成時期はこれまで中期と考えられてきたが、遺物の年代などから前期にさかのぼる可能性がある。

横穴墓は、岩沼西部丘陵から派生する低位丘陵の斜面に多く造られ、これまでに10箇所の横穴墓群が確認されている（消滅した横穴墓群を含む）。このうち、長谷寺【11】、丸山【4】、二木【9】、土ヶ崎【23】、引込【31】などの横穴墓群は過去に発掘調査が行われ、造営時期はいずれも7世紀前半から8世紀前半と考えられている。

北原遺跡【8】をはじめとする長岡丘陵遺跡群は前期の集落跡として知られるが、そこから南へ約500mの位置に所在する熊野遺跡【16】でも、平成25年（2013）の駐車場整備工事に伴う発掘調査において、同時期の堅穴住居跡群が発見された。また、孫兵衛谷地遺跡【13】では、平成24年（2012）の河川改修工事に伴う確認調査の際、前期の塩釜式に位置付けられる土師器を含む遺物包含層の存在が明らかとなつた。

なお、これまで古墳と考えられていた東平王塚古墳、白山古墳、にら塚古墳については、平成26年（2014）末までに行なった市史編纂事業に伴う調査の結果、積土が確認されず古墳と認められなかつた。そのため、現在はそれぞれ、東平王塚【22】、白山塚【41】、にら塚遺跡【43】と遺跡名称を変更している（岩沼市史編纂委員会2015a）。

古代

古代の遺跡については、近年、震災復興事業や市史編纂事業による発掘調査が増加傾向にあり、なかでも高大瀬遺跡と原遺跡については、学術的に注目される調査事例として特筆される。

高大瀬遺跡では、平成25年（2013）に実施した矢野目排水機場建設工事に伴う確認調査において、東日本大震災を含め、3時期の津波堆積物の可能性がある基本層を検出している。これらはそれぞれ、慶長16年（1611）の津波堆積物、貞觀11年（869）の津波堆積物を含んでいる可能性が高いと考えられ、現代の津波痕跡と過去の津波痕跡と思われる基本層を比較検討できる貴重な事例として報告されている（岩沼市史編纂委員会2015a）。なお、高大瀬遺跡では平成26年（2014）にもいわぬま臨空メガソーラー事業に伴う発掘調査が行われており、東日本大震災の津波堆積物を詳細に観察した結果、津波における砂泥の堆積構造は地形的要因などによって一様でないことを明らかにした（岩沼市教育委員会2016c）。

原遺跡【52】では、平成28年（2016）に実施した圃場整備に伴う水路敷設部分の確認調査において、一辺約1mを測る方形の柱穴跡や、3時期の作り替えを確認できる南北方向の大溝跡などが検出されている。また、東海地方で生産されたと考えられる円面硯や、福島県会津地方で生産された須恵器、古代瓦片などが見つかったほか、土師器や須恵器が大量に出土するなど、遺構や遺物の特徴から官衙的な施設の存在が示唆される。10世紀に成立した『延喜式』に東山道の駅家として記載された「玉前駅家」や、多賀城跡より出土した9世紀代と考えられる過所木簡（宮城県多賀城跡調査研究所1985）でその名が知られる「玉前駅（関）」は、本市南長谷地区の玉崎に存在が比定されおり、原遺跡ではこれらの中核的な施設が営まれていた可能性がある（岩沼市教育委員会2016e）。

上記の遺跡以外では、熊野遺跡【16】で実施された平成27年（2015）の駐車場整備（拡張）工

第3図 岩沼市遭跡地図

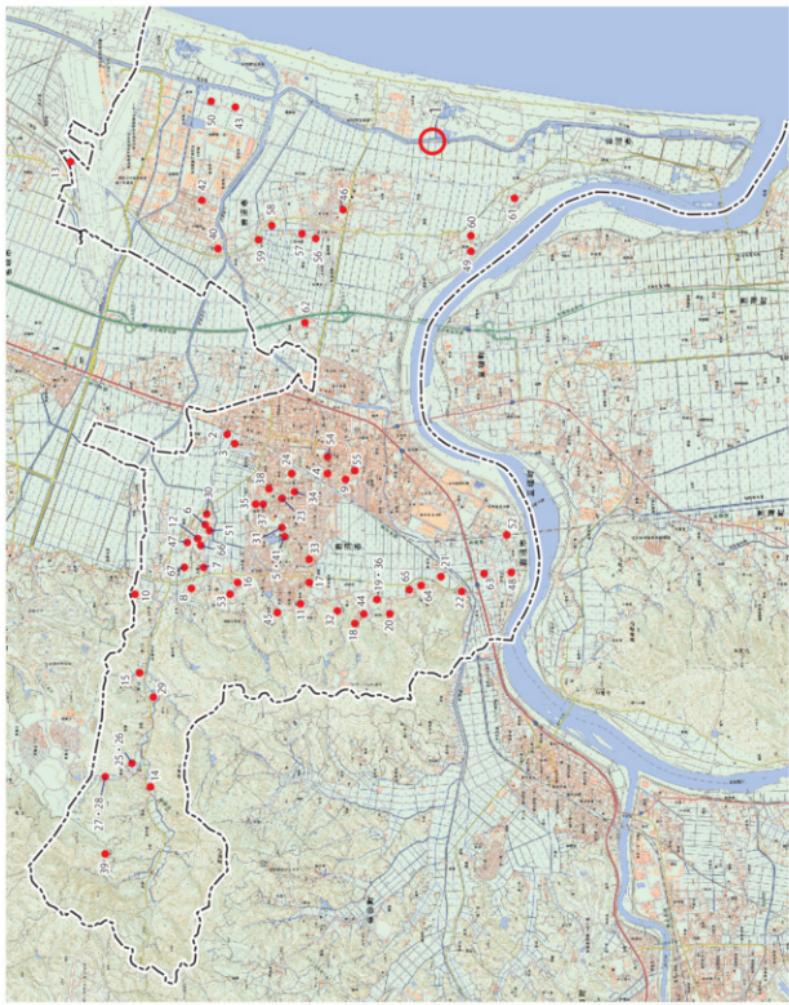


表1 岩沼市内遺跡一覧

図中番号	登録番号	遺跡名	所在地	種別	時代
2	15001	かめ塚古墳	字亀塚	古墳	古墳
3	15002	かめ塚西遺跡	字亀塚	遺物散布地	弥生・古代・近世
4	15003	丸山横穴墓群	二木二丁目	横穴墓	古墳
5	15004	白山横穴墓群	十七崎四丁目ほか	横穴墓	古墳
6	15005	新明塙古墳	長岡字坂屓	古墳	古墳
7	15006	杉の内遺跡	三色吉子杉の内ほか	集落跡	弥生・古墳・古代
8	15007	北原遺跡	長岡字北原ほか	集落跡・貝塚	縄文・弥生・古墳・古代
9	15008	二木横穴墓群	二木二丁目	横穴墓	古墳
10	15009	山畠南丘貝塚	小川字山畠南ほか	集落跡・貝塚	縄文・古代
11	15010	長谷寺横穴墓群	北長谷字畠向山	横穴墓	古墳・古代
12	15011	長塙古墳	杉岡字台	古墳	古墳
13	15012	孫兵衛谷地遺跡	下野郷字小谷地	遺物散布地	古墳
14	15013	大日遺跡	志賀字新八日	集落跡	縄文
15	15014	下塙ノ入遺跡	志賀字下塙ノ入ほか	集落跡	縄文
16	15015	熊野遺跡	三色吉子熊野ほか	集落跡	古墳・古代
17	15016	平等山横穴墓群	三色吉子畠松崎	横穴墓	古墳
18	15017	新撫跡	北長谷字畠下	城跡	伊良
19	15018	細上横穴墓群	北長谷字細上	横穴墓	古墳
20	15019	現方気遺跡	南長谷字夙	遺物散布地	弥生・近世
21	15020	長谷小師跡	南長谷字姪	城跡	伊良
22	15021	東平王塚	南長谷字京	塚	不明
23	15022	土ヶ崎横穴墓群	十七崎二丁目	横穴墓	古墳・古代
24	15023	鶴ヶ崎城跡	金町一丁目ほか	城跡跡	縄文・弥生・中世・近世
25	15025	八森A遺跡	志賀字新八森	集落跡	縄文
26	15026	八森B遺跡	志賀字八森	集落跡	縄文
27	15027	御谷A遺跡	志賀字御谷	集落跡・製鉄跡	縄文・近世
28	15028	御谷B遺跡	志賀字御谷	集落跡・製鉄跡	縄文・近世
29	15029	新宮下遺跡	志賀字新宮下	集落跡	縄文
30	15030	上根崎遺跡	長岡字上根崎ほか	集落跡	縄文・弥生・古代・中世
31	15031	引込横穴墓群	十七崎四丁目	横穴墓	古墳
32	15032	古閑山遺跡	北長谷字古閑山	遺物散布地	弥生・古墳・古代
33	15033	新田遺跡	北長谷字新田ほか	遺物散布地	縄文・古代
34	15034	石垣山横穴墓群	朝日一丁目	横穴墓	古墳
35	15035	鶴崎横穴墓群	朝日二丁目	横穴墓	古墳
36	15036	強提上貝塚	北長谷字堤提上	集落跡・貝塚	縄文・弥生・古墳・古代
37	15037	朝日山古墳群	朝日一丁目	古墳・墓・遺物散布地	弥生・古墳・中世・近世
38	15038	胡日遺跡	朝日一丁目	遺物散布地	古墳・古代・中世
39	15039	岩蔵寺遺跡	志賀字寺師	集落跡・寺院跡	縄文・古代・中世
40	15040	下野郷跡	下野郷字船内・諏内ほか	城跡跡	古代・中世・近世
41	15041	白山塚	字朝日	塚	近世?
42	15042	諏外遺跡	下野郷字諏外	遺物散布地	古代・近世
43	15043	じら屋遺跡	下野郷字人頭ほか	遺物散布地	古代
44	15044	新竹跡の前跡	北長谷字堤提上	遺物散布地	縄文・古代
1	15045	真山塚(小堀塚)	用の釜～箱屋	河原	近世
45	15046	竹貯部遺跡	三色吉子竹貯部	遺物散布地	弥生・古墳・古代
46	15047	新田東遺跡	押分子新田東	遺物散布地	古代・近世
47	15048	長塙北遺跡	長岡字上根崎	遺物散布地	縄文・古墳・古代
48	15049	南玉崎遺跡	南谷字南玉崎ほか	遺物散布地	古代・近世
49	15050	西須賀原遺跡	早駒字西須賀原ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
50	15051	高大瀬遺跡	下野郷字高大瀬ほか	遺物散布地	古代・近世
51	15052	長徳寺前遺跡	長岡字岡越	跡跡	近世
52	15053	原遺跡	南長谷字中原ほか	遺物散布地	古墳・古墳
53	15054	中ノ原遺跡	三色吉子中ノ原ほか	墓	中世
54	15055	丸山遺跡	二木二丁目ほか	集落跡	中世・近世
55	15056	竹脇社境内遺跡	福荷町	社守跡	中世・近世
56	15057	新筒下遺跡	押分子新筒下ほか	遺物散布地	古代・近世
57	15058	沼前遺跡	押分子沼前ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
58	15059	西十手遺跡	押分子西十手ほか	遺物散布地	中世・近世
59	15060	前條遺跡	下野郷字前條	遺物散布地	古代・近世
60	15061	刈原遺跡	早駒字刈原ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
61	15062	新原遺跡	今島字新原	遺物散布地	中世・近世
62	15063	上中野遺跡	下野郷字上中野ほか	遺物散布地	古代・中世・近世
63	15064	舗道跡	利長谷字ほか	遺物散布地	縄文・古墳・古代・中世・近世
64	15065	柳遺跡	南長谷字柳	遺物散布地	古墳・古代・近世
65	15066	台遺跡	南長谷字台	遺物散布地	縄文・弥生・古墳・古代
66	15067	段塙遺跡	長岡字台	遺物散布地	縄文・古墳
67	15068	上小湖遺跡	長岡字上小湖ほか	集落跡	弥生・古墳・古代

事に伴う発掘調査において、10世紀前半のものと思われる住居跡が発見された（岩沼市教育委員会 2015）。また、市史編纂事業の一環で行われた試掘調査により、樋遺跡【63】、柳遺跡【64】、台遺跡【65】が古代の遺跡として新たに登録された（岩沼市史編纂委員会 2015a）。

ところで、にら塚遺跡【43】では、過去に土師器、須恵器、製塙土器が採取されており、古代の製塙関連遺跡であった可能性がある。しかしながら、平成 26 年（2014）に行なったいわぬま臨空メガソーラー事業に伴う発掘調査では、当該地の地形は過去に大きく改変され、従来の姿を留めていないことが確認された。原因は昭和 50 年代に行なわれた土砂採取事業によるものと考えられるが、このことは、埋蔵文化財の記録保存を適切に行わない開発行為が、後世へどれほどの文化的な損失を与えるのかを如実に示している（岩沼市教育委員会 2016c）。

中世

中世の遺跡は、過去に朝日遺跡【38】、鶴ヶ崎城跡【24】、丸山遺跡【54】、竹駒神社境内遺跡【55】、下野郷館跡【40】、西須賀原遺跡【49】などで発掘調査が行なわれている。

近年の調査事例としては、上根崎遺跡【30】で平成 23 年（2011）に県道自歩道整備事業に伴う発掘調査が実施され、屋敷地を区画したとみられる溝跡、土壙墓や地下室（ムロ）状の土坑、掘立柱建物や堀の可能性のある小穴群などの遺構が検出された。土壙墓の年代は出土した陶器から中世の可能性があり、そのほかの遺構も中世以降のものと思われる（岩沼市教育委員会 2012）。

岩蔵寺遺跡【39】では、平成 25 年（2013）に市史編纂事業に伴う発掘調査を実施している。この調査では、薬師堂の裏手に所在する板碑及び集石遺構付近から、火葬骨片が入ったピットや長さ 1.4m ほどの板状の石材を確認したことから、当該地が葬送や供養の場として機能していたと推量されている（岩沼市史編纂委員会 2015b）。

刈原遺跡【61】では、平成 26 年（2014）に実施した農山漁村地域復興基盤総合整備事業に伴う発掘調査において、農業用の水溜施設と考えられる遺構の覆土中より白石古窯跡群のものと考えられる甕片が出土している（岩沼市教育委員会 2016a）。

熊野遺跡【16】では、平成 27 年（2015）の発掘調査において、長軸 3.9m、短軸 2.4m を測る方形堅穴遺構が確認された。これは倉庫的な性格を持つ遺構と推定されるが、底面からは龍泉窯系の鍋蓮弁文青磁碗片が出土していることから、当該地周辺に在地富裕層などが存在した可能性がある（岩沼市教育委員会 2015）。

下野郷館跡では、平成 28 年（2016）に実施した五間堀川河川改修事業に伴う発掘調査において、13世紀後半から14世紀前半の遺物を伴う井戸跡や区画溝と考えられる遺構が確認され、これまでの調査では少量に留まっていた中世遺物が数多く出土している。遺跡の立地を勘案すると、ふたつの河川の結節点に水運を掌握する在地勢力が存在していた可能性があり、玉浦地区の地域支配のあり方を考える上でも大きな成果となっている（岩沼市教育委員会 2016d）。

近世

本市は近世において城下町、宿場町として発展し、竹駒神社の門前町としても賑わいを見せたといわれ、調査実績もほかの時代に比べて近世遺跡が多い傾向にある。過去には、鶴ヶ崎城跡【24】、丸山遺跡【54】、竹駒神社境内遺跡【55】、下野郷館跡【40】、西須賀原遺跡【49】などで発掘調査

が行われ、仙台藩政期の社会を研究する上で貴重な成果が得られている。

近年では、平成 26 年（2014）に西土手遺跡【58】、新簡下遺跡【56】、刈原遺跡【60】、高原遺跡【61】などで農山漁村地域復興基盤総合整備事業に伴う発掘調査を行い、それぞれの遺跡で近世遺物や同時期の遺構を確認している（岩沼市教育委員会 2016a）。

下野郷館跡では、平成 28 年（2016）の発掘調査において、大型の掘立柱建物跡や護岸施設、多数の井戸跡や溝跡などを検出している。掘立柱建物跡は桁行 8 間以上、梁行 3 間を測り、柱穴は概ね長方形を呈する。東側は調査区外となり全体規模は不明であるが、岩沼市内でこれまでに見つかった掘立柱建物のなかでは最大規模の建築物である。また、護岸施設は水運に関連する遺構と考えられ、地山を大きく掘り込み、杭や板材などで木枠を作ってから川原石を積み上げる工法が施されていた。遺跡から出土した遺物の年代観は概ね 17 世紀代であり、城郭跡や武家屋敷跡で見られる「青花」などの貿易陶磁が発見されていることから、当該地は矢野目足軽が成立する以前の領主層（佐藤氏・奥山氏）に関わる遺跡と考えられる（岩沼市教育委員会 2016d）。

近現代

貞山堀【1】では、平成 24 年（2012）から平成 27 年（2015）にかけて、排水機場の復旧事業に伴う調査が実施されている。これらの調査では、昭和 42 年（1967）以降に築堤された堤防に先行する時期の堤防積土が、左岸を中心に残されていることを確認している（岩沼市教育委員会 2016b）。

【引用・参考文献】

- 岩沼市 1992 『岩沼市土地分類調査（細部調査）報告書・現況調査編』
- 岩沼市教育委員会 2005 『鶴ヶ崎城跡・第 4 地点』 岩沼市文化財調査報告書第 6 集
- 岩沼市教育委員会 2012 『上根崎遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第 11 集
- 岩沼市教育委員会 2015 「熊野遺跡（2 次調査）の概要」『平成 27 年度宮城県遺跡調査成果発表会』
発表要旨 宮城県考古学会
- 岩沼市教育委員会 2016a 『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』 岩沼市文化財調査
報告書第 14 集
- 岩沼市教育委員会 2016b 『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』 岩沼市文化財調査
報告書第 15 集
- 岩沼市教育委員会 2016c 『高大瀬遺跡・にら塚遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第 16 集
- 岩沼市教育委員会 2016d 「下野郷館跡第 11 次調査の概要」『平成 28 年度宮城県遺跡調査成果発
表会』発表要旨 宮城県考古学会
- 岩沼市教育委員会 2016e 『原遺跡の調査成果について（中間報告）』
- 岩沼市史編纂委員会 2015a 『岩沼市史』第 4 卷 資料編 I 考古 岩沼市
- 岩沼市史編纂委員会 2015b 『岩沼市史』第 5 卷 資料編 II 古代・中世 岩沼市
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1985 『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984 多賀城跡』

2. 岩沼市域における貞山堀の沿革（第4図）

岩沼市域を走る貞山堀の開削時期については諸説あるが、仙台藩初代藩主である伊達政宗の治世下である慶長年間とする説が、現時点では最も有力である（遠藤剛人 1989、渡辺信夫 1994など）。初期の開削工事については、阿武隈川河口である岩沼市寺島字蒲崎から名取川河口である名取郡閑上までの区間を最初に着手、完成したことが、正保年間に描かれたと考えられる『陸奥国仙台領国絵図』（仙台市博物館所蔵）での記載から判断できる。工事に際しては土木技術に精通していた長州浪人である川村孫兵衛重吉が伊達家に召し抱えられた後に名取郡早戸村（現・岩沼市）内に所領を拝領していたことから、この人物を中心に工事が行われていたことが『宮城県土地改良史』（宮城県土地改良史編纂委員会 1994）などで推察されているが、裏付けとなる文献史料はこれまでのところ認められていない。この運河開削の目的としては、第一には開削時期が仙台城下の整備・拡張期と重なることから、木材をはじめとした物資を外洋を経ずに安全に搬入するため、第二には仙台湾沿岸部で広域的に存在していた湿地を新田開発する際の排水機能を担っていた可能性が考えられている（渡辺 1994）。さらに震災後には慶長 16 年（1611）に発生した慶長三陸津波に見舞われた仙台藩が、復興事業の一つとして貞山堀の開削を行った可能性を示唆する見解（佐藤昭典 2015）も示されている。なお、江戸期にはこの区間の名称は「内川」（『陸奥国仙台領国絵図』）や「木引堀」（『渡辺家文書目録』）、「木ヒキ堀」（『阿武隈川絵図』）と呼称されていたと考えられる（馬場俊介 2014）。また当時の川幅は最大でも 15 m 程度であったことが、明治 10 年頃に作成された『宮城縣地誌』の記載から推量されている（遠藤 1989）。

明治期になると、鳴瀬川の河口に位置する東松島市野蒜地区を東北地方太平洋側の主要港とする計画が明治政府によつて策定され、明治 11 年（1879）から築港工事が実施された。これに伴い、物資を円滑に輸送できるよう当市域を含めた貞山堀の改修事業が、明治 16 ~ 22 年（1883 ~ 89）にかけて実施された。この



第4図 貞山堀の位置と区分

うち明治 19 年（1886）には、当時の県令であった松平正直が工事の視察に訪れており、蒲崎付近での掘削工事の様子や宮城縣集治監の囚人 300 名ほどが使役されていたことが報じられている（奥羽日日新聞 1986）。当時の工事は過酷を極めたようであり、死亡した囚人の墓碑が当市寺島宇蒲崎に所在する専光寺境内にかつては存在していた（岩沼市 1984）ようであるが、東日本大震災以降は所在が不明となっている。なお、「貞山堀」という名称は明治 13～14 年（1880～81）頃に宮城県の土木課長であった早川智寛が、この一大運河建設事業は仙台藩初代藩主である伊達政宗の悲願であったことに思いを馳せ、その法名の文字から名付けたことは広く知られるところである。その後、明治時代～昭和 30 年代までは仙台市・多賀城市・塩竈市付近での改修工事計画などは記録に残されているが、岩沼市～名取市の区間では工事が行われた記録は見当たらない。

当市城区間の貞山堀における明治時代以降の画期としては、昭和 42～56 年（1967～81）にかけて実施された国営事業である「国営名取土地改良事業」が行われたことである。この事業は、岩沼・名取東部では 100ml 程度の降雨でも水田が冠水し、また洪水などの際には貞山堀へ阿武隈川・名取川の両河川が逆流して水位が高くなり湛水被害が相次いだことを受けて、貞山堀周辺の排水不良地の改良と併せて用排水施設の新設・改修を行ったものである。なお、この事業推進の背景にあるものは昭和 36 年（1961）に制定された「農業基本法」である。

事業開始に至るまでの岩沼市・名取市の地区の動向をみると、昭和 27 年（1952）に岩沼・名取の市町村長、農業団体有志によって「名取耕土土地改良事業期成同盟会」が設立され、昭和 34 年（1959）から國営事業として各種の調査等を開始、そしてこれらが終了した昭和 42 年（1967）から事業を開始している。この事業によって五間堀川との合流地点より北では川幅が 51 m へ拡幅され、また堤防の嵩上げも実施されている。合流地点より南側では西岸堤防において堤防嵩上げ、そして護岸施設としてコンクリート加圧矢板を水際に設置するなどの工事が施工され、東岸では長谷釜付近までがコンクリート加圧矢板が設置された。また相の釜・藤曾根の両排水機場も設置され、内水被害は飛躍的に減少した。しかしながら反面で、この事業の実施により明治から続く貞山堀の面影が、ごく一部を残して姿を消した。なお、五間堀川合流地点南側の工事については西岸を名取土地改良区、東岸を宮城県が担当しているが、長谷釜以南の東岸での施工については範囲、工法とも明確に判断できる資料は現時点まで見当たらない。

平成に入ってからも貞山堀では主に水際の護岸を目的とした改修が数度実施されているが、いずれも小規模なものに留まっていた。しかしながら、平成 23 年（2011）3 月 11 日に発生した東日本大震災によって大きな被害を受けたことから、現在貞山堀の全区間で大規模な灾害復旧事業が進展中である。時代とともにその姿を変えてきた貞山堀であるが、その中でも最大の画期を今、迎えていると言えよう。

第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

貞山堀では昭和 42 年以降に国営事業として「国営名取土地改良事業」が行われ、河川拡幅と大規模な護岸改修が実施されたが、東北地方太平洋沖地震に伴う津波による洗掘などの影響により、各所で大きく損壊した。

これら護岸施設などが被った甚大な災害被害からの復旧を図ることは、浸水被害を受けた岩沼市東部地区全域が復興していく上では喫緊の課題のひとつであった。このため、宮城県仙台土木事務所では、早急に復旧事業計画が策定された。

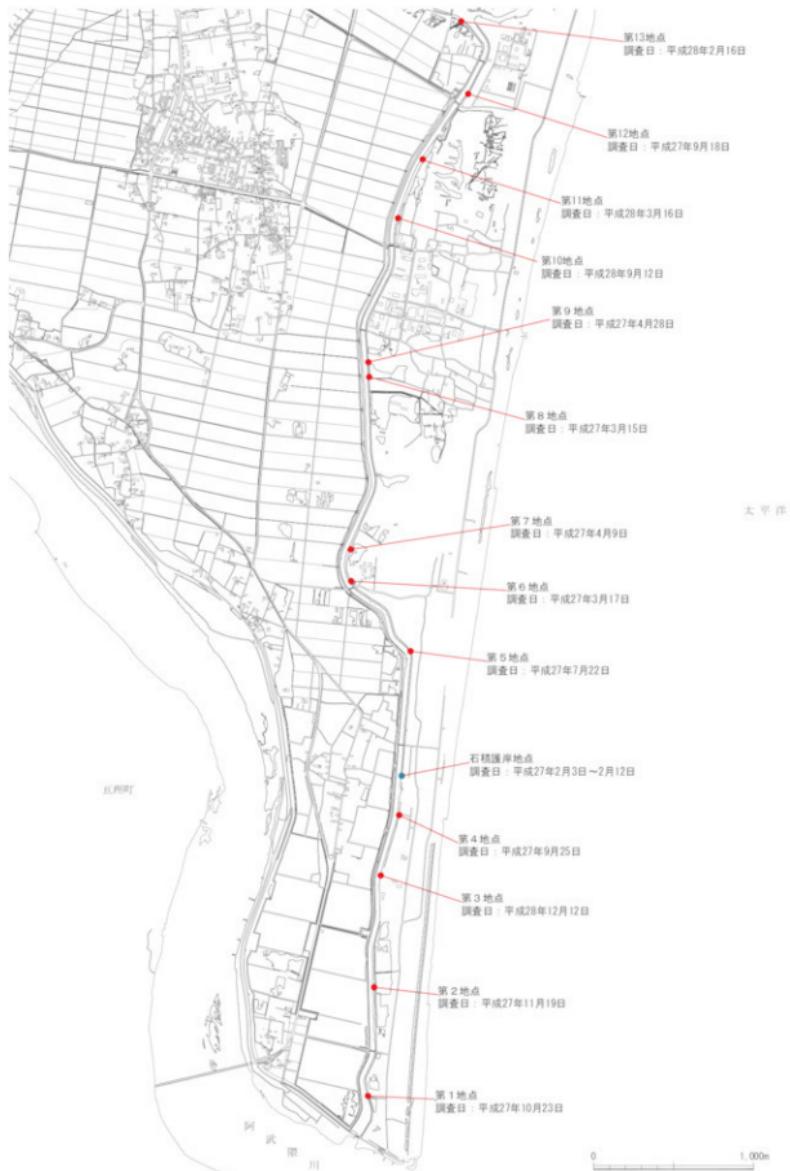
平成 23 年 11 月、岩沼市で行われた横断的な各種復興事業に関する打ち合わせが行われた際、市教育委員会生涯学習課から貞山堀で現状変更を伴う復興事業は埋蔵文化財への影響を及ぼすことになり、宮城県教育委員会文化財保護課と協議が必要となる旨を説明した。その後、平成 24 年 11 月 8 日付けで協議書が提出されたことを受けて、11 月 19 日に県教育委員会と仙台土木事務所、市教育委員会の 3 者による現地協議を行い、県教育委員会より貞山堀堤防を開削する工事については確認調査を実施すること、および護岸施設が良好な状態で確認できる箇所では発掘調査を実施すること、という指示を受けた。その後、平成 26 年 4 月 8 日付けで文化財保護法第 92 条に基づく発掘通知が提出され、調査の開始時期や方法について仙台土木事務所・市教育委員会で協議を行い、仙台土木事務所が調査に関する業務を市へ委託し、市教育委員会生涯学習課が調査を実施する運びとなった。

2. 調査経過（第 5 図）

調査はまず⁴、蒲崎橋南側左岸において確認された石積護岸施設での発掘調査を皮切りとして、樋管部分については事業の進捗状況に合わせて随時確認調査を実施した。各調査期間については以下のとおりである。なお樋管部分の調査地点名は、調査順ではなく南側より北側にかけて付している。

表 2 貞山堀調査地点一覧

地点名	所在地	調査期間
石積護岸地点	岩沼市寺島字北新田地内	平成 27 年 2 月 3 日～2 月 12 日
第 1 地点	岩沼市寺島字川向地内	平成 27 年 10 月 23 日
第 2 地点	岩沼市寺島字川向地内	平成 27 年 11 月 19 日
第 3 地点	岩沼市寺島字川向地内	平成 28 年 12 月 12 日
第 4 地点	岩沼市寺島字川向地内	平成 27 年 9 月 25 日
第 5 地点	岩沼市寺島字北新田地内	平成 27 年 7 月 22 日
第 6 地点	岩沼市寺島字北新田地内	平成 27 年 3 月 17 日
第 7 地点	岩沼市早殿字前川地内	平成 27 年 4 月 9 日
第 8 地点	岩沼市早殿字前川地内	平成 27 年 3 月 15 日
第 9 地点	岩沼市早殿字前川地内	平成 27 年 4 月 28 日
第 10 地点	岩沼市押分子須加原地内	平成 28 年 9 月 12 日
第 11 地点	岩沼市押分子須加原地内	平成 28 年 3 月 16 日
第 12 地点	岩沼市下野郷字藤曾根地内	平成 27 年 9 月 18 日
第 13 地点	岩沼市下野郷字藤曾根地内	平成 28 年 2 月 16 日



第5図 各調査地点位置図

第III章 調査成果概要

1. 石積護岸地点の調査成果（第6・7図）

蒲崎橋南側では、現在の左岸堤防の西側に一段低い平坦面が連続して存在する。この平坦面の水際の一部には、南北14mほどの範囲に安山岩を石材として用いた石積護岸が存在している。調査着手時には北寄りの箇所では一部で大きく損なわれ、碎石が充填されていた。調査はこの石積み護岸の時期、および現在の堤防より一段低い平坦面の性格を把握することを目的として実施した。

調査の結果から、平坦面については仙台平野沿岸部で顕著に発達する浜堤を利用し、その上位に粘土を混入した褐色砂で盛土していることが判明した。また石積護岸付近の盛土上面の精査では、かつて堤防上に樹木が存在していた痕跡がみとめられた。さらに堤防を断ち割った土層観察の結果、現在みられる堤防はこの盛土層の東側に貼り増していることが明らかとなり、浜堤砂と盛土層は昭和42～61年に実施された「国営名取土地改良事業」による護岸工事以前の堤防であることが明らかとなった。

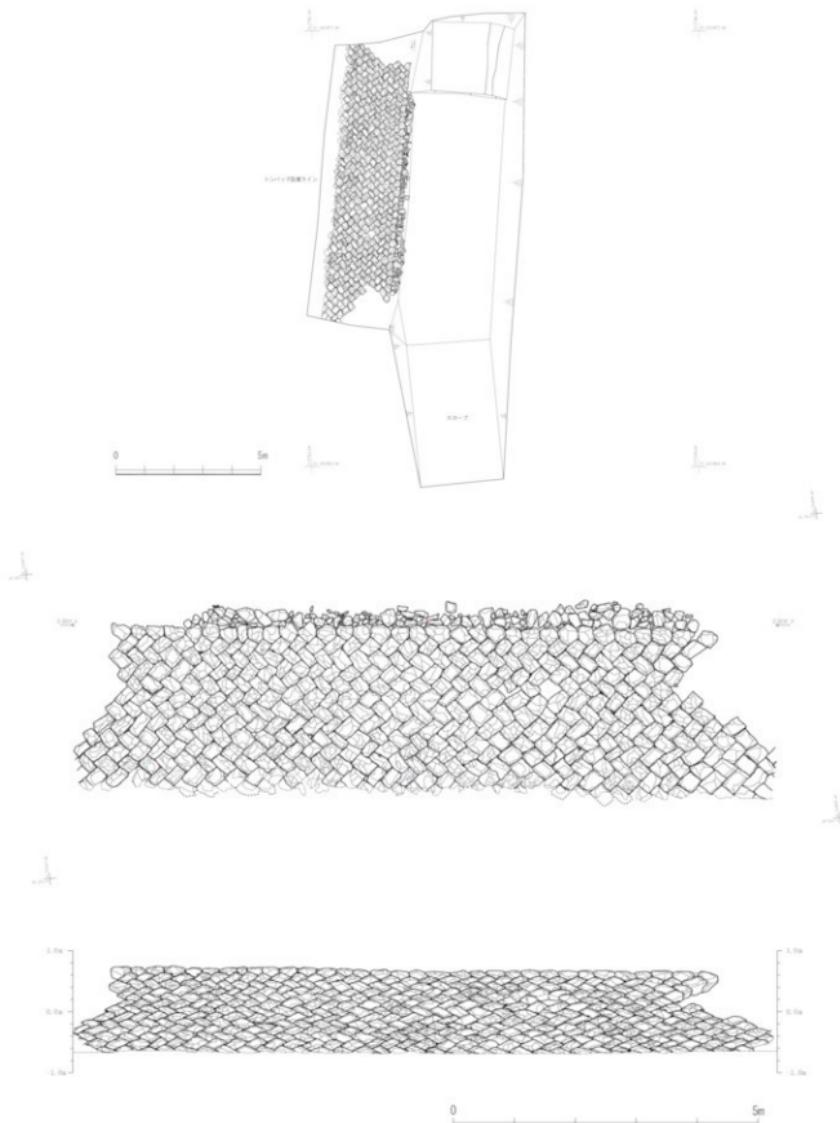
石積護岸は、良好に遺存する南側で調査を実施した。調査では河川内に大型土のうを積み上げて排水しながら作業を実施したが、下端部の調査については排水しきれないため未実施である。確認できた石積みはすべて天端石がそろっていることから、後世の掘削などによる上部の破壊の可能性はない。石材の積み上げは継織状に積まれ、石材同士が接する端部は緻密に整形されており、目地などにコンクリート等による補強の痕跡は見られない。使用された石材はすべて安山岩であり、前述の堤防盛土層の東側では安山岩が剥離した石片が多数みられたことから、石材を現地で最終的に整形した可能性が考えられる。天端石を平面的に検出したところ、その背後には裏込めが存在することが明らかとなり、断面観察から石積護岸は浜堤砂を掘り込んで裏込めを行った後、表面を整えていることが明らかとなった。また旧堤防を構成する盛土層は、この石積護岸を覆っていることも併せて判明し、現在までの堤防は①浜堤砂を掘り込む→②裏込めをして石積み護岸を構築する→③浜堤砂および石積み護岸の上に盛土を行う→④旧堤防の完成→⑤旧堤防の東側に盛土を行う→⑥現在の堤防が完成、と変遷過程が明らかとなった。



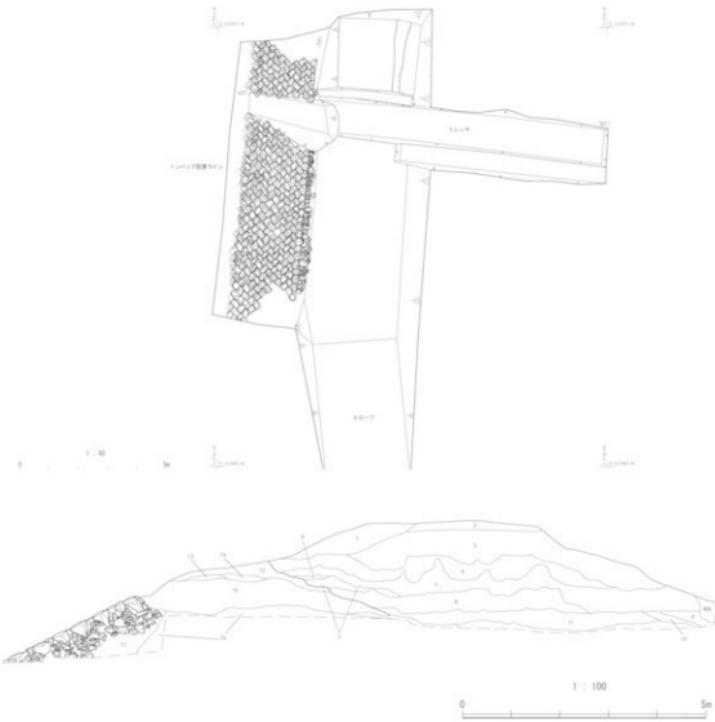
写真7 石積護岸確認状況



写真8 満潮時の水没風景



第6図 石積護岸の平面・立面図



層No.	土色	土質	特徴
1	砂石		工事用盛土
2	砂石		堤防上の路盤
3	明赤褐色	5YR5/6	粘質シルト 極めて硬化する。凝灰岩粒を多量、暗褐色粘土の中プロックを少量含む
4	黄褐色	10YR8/6	砂質シルト 破碎した凝灰岩粒で構成。赤褐色粘土の小プロックを少量含む
5	赤褐色	5YR4/6	粘質シルト 凝灰岩小片、および凝灰岩粒をやや多く含む
6	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト 砂利を少量含む
7	砂石		
8	黄褐色	10YR8/6	砂質シルト 破碎した凝灰岩粒・繩を多量含む。極めて硬化する
9	暗褐色	10YR3/3	凝灰岩粒をやや多く含む
10	黒褐色	10YR3/1	細粒砂主体 繩をやや多く含む
11	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト しまり強い。暗灰色粘土の小プロックを少量含む
12	暗褐色	10YR3/3	暗褐色粘土粒を少量含む
13	褐色	10R4/1	細粒砂主体 暗褐色粘土の小プロックを少量含む。
14	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂層 微粒砂主体 暗褐色粘土の小プロックをやや多く含む。
15	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂層 細粒砂主体 暗褐色粘土塊を少量含む
16	褐色	10YR4/4	砂層 細粒砂主体 暗褐色粘土粒をごく微量含む
17	灰黄褐色	10YR4/2	砂層 灰褐色粘土塊を少量含む。16層との境には酸化鉄が集積する

第7図 石積護岸と堤防断面図



写真9 石積護岸検出状況



写真10 石積護岸天端の状況

写真11 石積の状況



写真12 石積護岸の断面

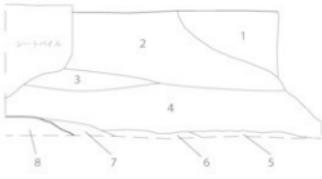
2. 各樋管地点の調査成果

a. 第1地点

調査日：平成 27 年 10 月 15 日

特記事項

- 工事に伴う掘削が浸水防止のシートパイル間際まで達しており、堤防築堤土の観察は部分的。
- 昭和 40 年代の堤防築堤土（2～7 層）の西側下位で、旧堤防築堤土の可能性がある 8 層を確認。



第8図 第1地点土層断面図



写真13 第1地点の堤防断面 (南から)

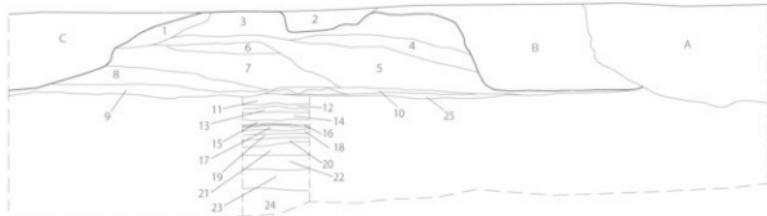
層 No.	土 色	土 質	特 徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト 工事用盛土
2	褐色	10YR4/4	シルト 山砂・凝灰岩片を多量含む
3	明黄褐色	2, 5Y6/6	シルト しまり極めて強い、山砂ブロック・凝灰岩片を少量含む
4	暗褐色	10YR3/3	シルト 凝灰岩塊を少量、凝灰岩小片を多量含む
5	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 拳大～人頭大の凝灰岩塊をやや多く含む
6	褐色	10YR4/4	砂質シルト 拳大～人頭大の凝灰岩塊を多量含む
7	褐色	10YR4/4	砂質シルト 凝灰岩小片を少量、暗褐色粘土の中ブロックをやや多く含む
8	褐色	10YR4/4	砂層 暗褐色粘土粒を微量含む
	明黄褐色	2, 5Y6/6	赤褐色粘土の小ブロックを極めて多量、凝灰岩小塊をやや多く含む

b. 第2地点

調査日：平成 27 年 11 月 19 日

特記事項

- 調査着手以前に、昭和 40 年代の堤防築堤土は大部分を掘削。このため調査時には東側に存在していた B 層のみを確認。
- 旧堤防構築土（1～10・25 層）は、砂質シルト、および砂層で形成。
- 昭和 40 年代の堤防は、旧堤防の上部、および東側に貼り増して築堤。
- 旧堤防の下位には湿地性の堆積土（11～24 層）が存在していることを確認。
- 昭和 40 年代の堤防は、護岸施設としてながら護岸を行っていたことを確認。



層 No.	土 色	土 質	特 徴
1	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト 砂利・暗褐色粘土粒を少量含む
2	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト 黒褐色粘土粒・砂利をやや多く含む
3	褐色	10YR4/4	砂質シルト 黄褐色粘土の小ブロックを多量含む
4	褐灰色	10YR4/1	砂層 黄褐色粘土の小ブロックを少量含む
5	にふい黄褐色	10YR4/3	砂層 黄褐色粘土の小ブロックを微量含む
6	褐色	10YR4/4	砂層 黄褐色粘土の小ブロックを微量含む
7	にふい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト 褐灰色粘土の小ブロックを少量、下位に酸化鉄をやや多く含む
8	オリーブ黒色	5Y2/2	砂層 褐色砂をやや多く、褐灰色粘土地を少量含む
9	黒褐色	10YR3/2	砂層 褐灰色粘土の薄層との互層、砂は細粒砂が主体
10	褐色	10YR4/4	砂層 細粒砂主体、酸化鉄をやや多く含む
11	黄褐色	10YR8/6	粘土 灰白色粘土の薄層を帯状に含む
12	黒褐色	10YR2/2	粘土 植物遺体を微量含む
13	灰白色	5Y7/2	粘土 下位に黒褐色粘土の薄層を部分的に含む
14	黄褐色	10YR8/6	粘土 植物遺体を微量含む
15	灰白色	5Y7/2	粘土 層厚 2 ~ 3 cm。下位に黒褐色粘土粒を多く含む
16	黒褐色	10YR3/1	植物遺体を微量含む。上位の色調は暗く、下位ほど明るい
17	黄褐色	10YR8/6	粘土 植物遺体を少量、上方に灰白色粘土の薄層を含む
18	灰白色	5Y7/2	粘土 植物遺体を微量含む
19	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 植物遺体をやや多く含む
20	黒褐色	10YR2/2	砂質シルト 未分解の植物遺体を多量含む
21	黒褐色	10YR3/2	砂層 細粒～中粒砂が主体
22	灰黄色	2, 5Y7/2	粘質シルト 暗褐色粘土の小ブロックをやや多く含む
23	灰オリーブ	5Y5/2	砂層 細粒～中粒砂が主体
24	褐灰色	10YR4/1	粘土 植物遺体を微量含む
25	褐灰色	10YR4/1	砂層 下位は極めて硬分化する。微粒砂主体。オリーブ黒色粘土の薄層を上位に含む

第9図 第2地点土層断面図



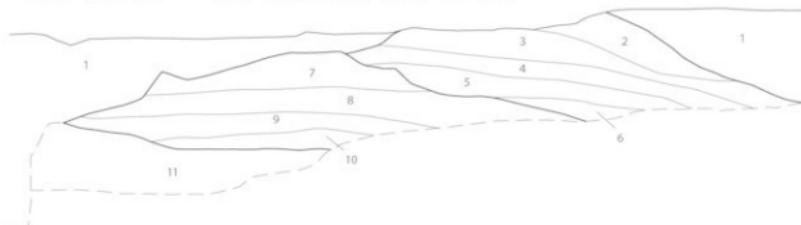
写真14 第2地点の堤防断面（南から）

c. 第3地点

調査日：平成28年12月12日

特記事項

- ・ 調査着手以前に、昭和40年代の堤防築堤土の上部を掘削。このため調査時には中位から下位に存在していた4～11層を確認。
- ・ 旧堤防構築土（1～10・25層）は、砂質シルト、および砂層で形成。
- ・ 昭和40年代の堤防は、旧堤防の上部、および東側に貼り増して築堤。
- ・ 旧堤防の下位には湿地性の堆積土が存在していることを確認。
- ・ 水際の護岸工法については、既存樋管設置の擾乱により不明。



層No.	土色	土質	特徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト 鐵、褐色粘土ブロックを多量含む。工事用盛土。
2	褐色	10YR4/4	砂質シルト 黄褐色粘土大ブロックを多量含む。
3	こぶい黄褐色	10YR4/3	砂利を少量含む。 硬化する。
4	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト 砂利を微量含む。
5	こぶい黄褐色	10YR4/3	褐色粘土中ブロックをやや多く、砂利を少量含む。 硬化する。
6	砂石		
7	褐色	10YR4/4	砂層 微粒砂主体。褐色粘土小ブロックを微量含む。
8	暗褐色	10YR3/3	砂層 微粒砂主体。こぶい黄褐色粘土中～小ブロックをやや多く含む。
9	褐色	10YR4/4	砂層 細粒砂主体。黒褐色粘土小ブロックをごく微量含む。
10	黒褐色	10YR2/2	砂層 微粒砂主体。下位に黒褐色粘土大ブロックを集積。
11	灰オリーブ色	5Y5/2	粘土 上位に厚さ3mm程度の白色粘土の薄層を互層状に含む。

第10図 第3地点土層断面図

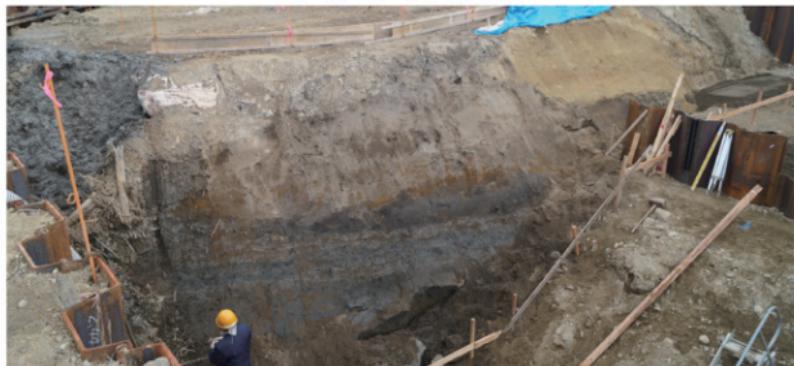


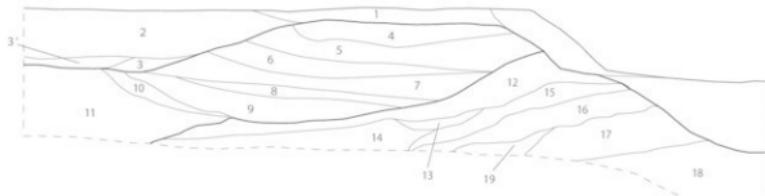
写真15 第3地点の堤防断面（南西から）

d. 第4地点

調査日：平成27年9月25日

特記事項

- ・調査着手以前に、昭和40年代の堤防築堤土の上部を掘削。このため調査時には中位から下位に存在していた4～11層を確認。
- ・旧堤防構築土（12～17・19層）は、砂質シルト、および砂層で形成。
- ・昭和40年代の堤防は、旧堤防の上部、および東側に貼り増して築堤。
- ・旧堤防の下位には湿地性の堆積土（18層）が存在していることを確認。



層No.	土色	土質	特徴
1	浅黄色	5Y7/3	砂質シルト 山砂主体
2	黒褐色	10Y3/1	砂質シルト 暗褐色粘土の小ブロック・砂利を多量含む
3	褐色	10YR4/4	砂層 粘粒砂主体、人頭大の礫を含む
3'	暗褐色	10YR3/2	砂層 暗褐色粘土粒・砂利をやや多く含む
4	明黄褐色	2, 5Y6/6	砂質シルト 山砂層。赤褐色粘土の中ブロックを多量含む
5	褐色	10YR4/4	粘質シルト 褐灰岩小塊をやや多く含む
6	明黄褐色	2, 5Y6/6	砂質シルト 山砂主体層。赤褐色粘土の中ブロックを極めて多量含む
7	赤褐色	5YR4/6	粘土 褐灰岩粒を多量、黒色土を少量含む
8	明黄褐色	2, 5Y6/6	粘土 赤褐色粘土の小ブロックを極めて多量、褐灰岩小塊をやや多く含む
9	明黄褐色	2, 5Y6/6	砂質シルト 山砂主体層。褐灰岩小塊・砂利をやや多く、黒褐色粘土の中ブロックを少量含む
10	暗褐色	10YR3/3	砂層 砂利・黒褐色粘土の小ブロックをやや多く含む
11	黒褐色	10YR3/2	砂層 砕石を極めて多量含む
12	暗褐色	10YR3/3	砂層 黒褐色粘土粒を微量含む
13	暗褐色	10YR3/3	砂層 暗褐色粘土の中ブロックを少量含む
14	黒褐色	10YR3/1	砂層 暗灰色粘土の中ブロックを多量含む
15	褐色	10YR4/4	砂層 暗褐色粘土の小ブロックをやや多く含む
16	褐色	10YR4/4	砂層 暗褐色粘土粒を微量含む
17	暗褐色	10YR3/3	砂層 水磨した小礫を微量含む
18	黒褐色	10YR2/2	粘土 分解が進んだ植物遺体を少量含む
19	暗褐色	10YR3/3	砂層 黒褐色粘土粒を微量含む

第11図 第4地点土層断面図



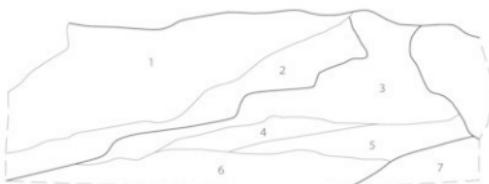
写真16 第4地点の堤防断面（北から）

e. 第5地点

調査日：平成27年6月22日

特記事項

- ・ 調査着手以前に、昭和40年代の堤防築堤土の上部、西側、東側をすでに掘削し、埋め戻しを行う。このため調査時には中位から下位に存在していた3～6層を部分的に確認。
- ・ 昭和40年代の堤防築堤土の西側下位で、旧堤防築堤土の可能性がある7層を確認。
- ・ 昭和40年代の堤防は、旧堤防の上部、および東側に貼り増して築堤。



層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト 工事用盛土
2	砂石		
3	明黄褐色	2,5Y7/6	シルト 山砂が主体。やや硬化する
4	暗褐色	10Y3/3	粘質シルト しまり強い。ガラス・ビニール頃・土のう袋などを含む
5	褐色	10Y4/4	砂質シルト しまり弱い。砂利・黒褐色粘土の小ブロックを少量含む
6	暗オリーブ灰色	2,5Gy3/1	砂質シルト 砂利・礫を多量含む
7	褐色	10YR4/4	砂層 細粒砂主体。極微量の植物遺体を含む。浜堤形成砂

第12図 第5地点土層断面図



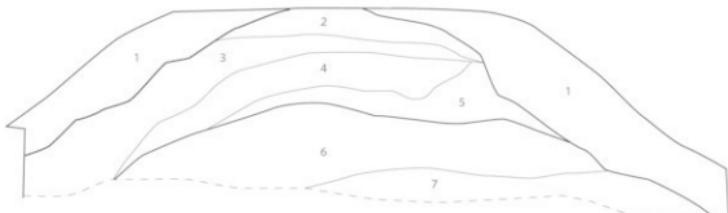
写真17 第5地点の堤防断面（北から）

f. 第6地点

調査日：平成27年3月17日

特記事項

- ・調査着手以前に、昭和40年代の堤防築堤土の最上部をすでに掘削。このため調査時には上位から下位に存在していた2～5層を確認。
- ・昭和40年代の堤防築堤土の西側下位で、旧堤防築堤土の可能性がある6・7層を確認。
- ・昭和40年代の堤防は、旧堤防の上部、および東側に貼り増して築堤。



層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10YR3/2	シルト 工事用盛土
2	黄褐色	10Y5/6	粘土 昭和40年代堤防構築の盛土層。砂利を多く含む
3	明黄褐色	2.5Y7/6	シルト 山砂を多量、暗褐色粘土塊を少量含む
4	暗褐色	10YR3/3	砂層 細粒砂。砂利を多量、褐色粘土塊をやや多く含む
5	黒褐色	10YR3/2	砂層 細粒～中粒砂。褐色粘土の中プロックを少量含む
6	褐色	10YR4/4	砂層 褐色粘土粒をやや多く含む
7	褐色	10YR4/4	砂層 灰白色粘土粒の中プロックをやや多く含む

第13図 第6地点土層断面図



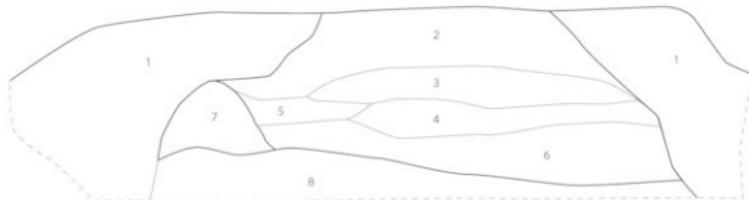
写真18 第6地点の堤防断面（北から）

g. 第7地点

調査日：平成27年4月9日

特記事項

- ・ 調査着手以前に、昭和40年代の堤防築堤土の最上部をすでに掘削。このため調査時には上位から下位に存在していた2～6層を確認。
- ・ 昭和40年代の堤防築堤土の西側下位で、旧堤防築堤土の可能性がある7層を部分的に確認。



層No.	土色	土質	特徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト 工事用盛土
2	褐色	10YR4/4	粘質シルト 砂利を多く含む
3	明黄褐色	2, 5Y7/6	シルト 破碎した凝灰岩片を極めて多量含む
4	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト 下位に炭化物をやや多く含む
5	黃褐色	10YR5/6	粘土 黒色粘土粒を多量含む。極めて硬化する
6	暗褐色	10YR3/3	砂層 黒褐色・暗褐色粘土の小ブロックを多量含む
7	褐色	10YR4/4	砂層 上位は細粒砂、下位は微粒砂が主体。全般的に暗褐色粘土粒をやや多く含む
8	褐色	10YR4/4	褐色細粒砂と暗褐色粘土の薄層が互層状に堆積する

第14図 第7地点土層断面図



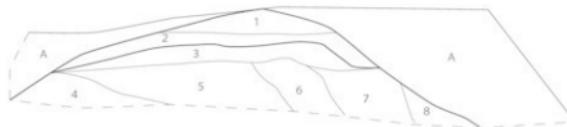
写真19 第7地点の堤防断面（北東から）

h. 第8地点

調査日：平成27年3月15日

特記事項

- ・調査着手以前に、昭和40年代の堤防築堤土の上部をすでに掘削。このため調査時には中位から下位に存在していた1・2層を確認。
- ・昭和40年代の堤防築堤土の西側下位で、旧堤防築堤土の可能性がある3～8層を確認。このうち3層の砂石層は、旧堤防が機能していた際の路盤であった可能性が考えられる。



層 No.	土色	土質	特徴
1	にじい黄褐色	10YR4/3	シルト 山砂・砾灰岩小片を少量含む
2	暗褐色	10YR3/3	しまり強い。砂利を少量含む
3	碎石		旧堤防の路盤の可能性あり
4	褐灰色	10YR4/1	褐色細粒砂を少量含む
5	褐色	10YR4/4	砂層 上位に褐灰色粘土の小ブロックを少量含む
6	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト しまりやや強い。黒褐色粘土の中ブロックを少量含む
7	褐色	10YR4/4	砂層 小礫を少量含む
8	黒褐色	10YR3/2	粘質シルト 植物遺体を少量含む
A	暗褐色	10YR3/3	シルト 工事用盛土

第15図 第8地点土層断面図



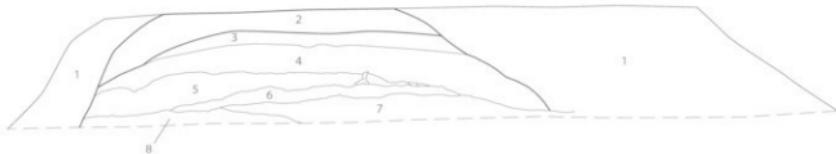
写真20 第8地点の堤防断面（南から）

i. 第9地点

調査日：平成27年4月28日

特記事項

- ・調査着手以前に、昭和40年代の堤防築堤土の上部をすでに掘削。このため調査時には下位に存在していた2層のみを確認。
- ・昭和40年代の堤防築堤土の西側下位で、旧堤防築堤土の可能性がある3～7層を確認。このうち3層の碎石層は、旧堤防が機能していた際の路盤であった可能性が考えられる。
- ・8層は明治以前の堤防築堤土、あるいは浜堤上に堆積していた旧表土の可能性がある。



層 No.	土 色	土 質	特 標
1	暗褐色	10YR3/3	シルト 工事用盛土
2	暗褐色	10YR3/3	砂質粘土 昭和40年代堤防構築の盛土層
3	砂石		
4	赤褐色	2.5YR4/6	粘質シルト 上部に土壤凝固剤と考えられる白色粒が5～10cmの厚みでみられる
5	褐色	10YR4/4	砂層 細粒～中粗砂。西側ほど粘土塊を多く含む。上位は極めて硬化する
6	暗褐色	10YR3/3	粘土 褐色細粒砂と互層状に堆積
7	黒色	10YR2/1	褐色細粒砂を少數含む
8	暗褐色	10YR3/3	酸化鉄をやや多く含む。上位では若干土壤化している

第16図 第9地点土層断面図



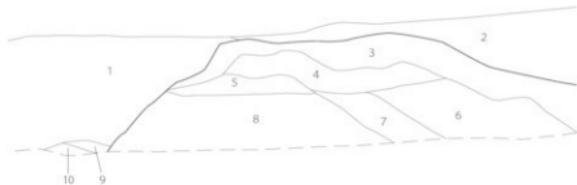
写真21 第9地点の堤防断面（南西から）

j. 第10地点

調査日：平成28年9月12日

特記事項

- ・調査着手以前に、昭和40年代の堤防築堤土の上部をすでに掘削。
- ・明治以前の堤防築堤土、あるいは自然堆積層は一切未確認である。



層 No.	土色	土質	特徴
1	黄褐色	10YR5/6	シルト 砂石多量含む。工事用盛土。
2	砂石		路盤用碎石。
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト しまりやや弱い。砂利、暗褐色シルト大ブロックをやや多く含む。
4	灰黄色	2.5Y7/2	粘土 しまり強い。黒褐色粘土小ブロックをやや多く含む。
5	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト しまり強い。黒褐色粘土中ブロックを少量含む。
6	黒褐色	10YR3/1	粘土 砂利をやや多く含む。
7	黄褐色	10YR5/6	シルト 砂利を極めて多量含む。
8	灰オーブン色	5Y5/2	粘質シルト 砂利を極めて多量含む。
9	黒褐色	10YR2/3	砂層 微粒砂主体。植物遺体をごく少量含む。
10	褐色	10YR4/4	砂層 粗粒砂主体。黒色粘土の薄層を部分的に含む。

第17図 第10地点土層断面図



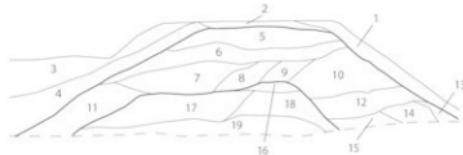
写真22 第10地点の堤防断面（南東から）

k. 第 11 地点

調査日：平成 28 年 3 月 16 日

特記事項

- ・ 調査着手以前に、昭和 40 年代の堤防築堤土の上部をすべてに掘削。
- ・ 昭和 40 年代の堤防築堤土の下位で、旧堤防築堤土の可能性がある 16 ~ 19 層を確認。このうち 16 層の碎石層は、旧堤防が機能していた際の路盤であった可能性が考えられる。



層 No.	土色	土質	特徴
1	暗褐色	10YR3/3	シルト 砂石多量含む。工事用盛土。
2	碎石		鉄盤用碎石。
3	暗褐色	10YR3/3	凝灰岩小塊を少量、微量含む。
4	明黄褐色	2, 5Y6/6	山砂主体。凝灰岩の小ブロック多量含む。
5	明黄褐色	2, 5Y6/6	極めて硬化。礫、凝灰岩小塊を多量含む。
6	暗黄褐色	2, 5Y6/6	極めて硬化。凝灰岩粒を極めて多量、小塊を少量含む。
7	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト 砂利を多量含む。
8	オリーブ黒色	5Y2/2	砂利を少量、拳大の凝灰岩を微量含む。
9	オリーブ黒色	5Y2/2	凝灰岩の小ブロックをやや多く含む。
10	にぶい黄褐色	10YR4/3	しまり弱い。凝灰岩小塊をやや多く含む。 非常に細かい碎石で構成。
11	碎石		細かい碎石主体であるが、小礫なども散見する。
12	碎石		植物遺体を微量含む。
13	暗褐色	10YR3/3	凝灰岩小塊を微量含む。
14	褐灰色	10YR4/1	しまり強い。凝灰岩小塊を微量含む。
15	暗黄褐色	2, 5Y6/6	砂利を少量、灰白色粘土大ブロックを微量含む。
16	碎石		やや粗めの砂利、小礫で構成。硬化する。
17	黒褐色	10YR2/2	微粒砂主体。黒色粘土の薄層を部分的に含む。
18	褐色	10YR4/4	微粒砂主体。下位ににぶい黄褐色中粒砂を混入。灰白色粘土大ブロックをやや多く含む。
19	褐灰色	10YR4/1	黒褐色微粒砂、褐色細粒砂を部分的にやや多く含む。

第 18 図 第 11 地点土層断面図



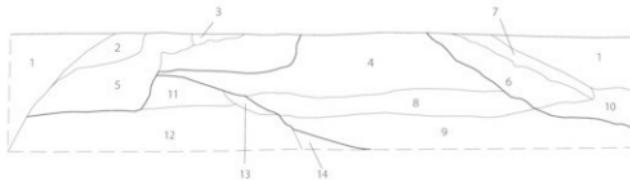
写真 23 第 11 地点の堤防断面（北西から）

1. 第12地点

調査日：平成27年9月18日

特記事項

- ・調査着手以前に、昭和40年代の堤防築堤土の上部、および西側の一部をすでに掘削。このため調査時には東側の中位から下位に存在していた4・8・9層を確認。
- ・昭和40年代の堤防築堤土の西側下位で、旧堤防築堤土の可能性がある11～14層を確認。
- ・1～3・5層は本工事に伴う盛土、6・7・10層は仙南浄化センター建設時の整地層と考えられる。



層No.	土色	土質	特徴
1	黒褐色	10YR3/2	工事用盛土
2	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘質シルト 凝灰岩塊を少量含む
3	暗褐色	10YR3/3	砂質シルト 黒褐色粘土の中ブロックを多量含む。硬化する
4	褐色	10YR4/4	粘質シルト 砂利・礫を多量含む。暗褐色粘土の中ブロックを少量含む
5	褐色	10YR4/4	砂質シルト 砂利・礫を多量含む。暗褐色粘土の中ブロックを少量含む
6	褐色	10YR4/4	砂質シルト 砂利・赤褐色粘土の中ブロックをやや多く含む
7	明黄褐色	2.5Y7/6	シルト 凝灰岩粒を少量含む
8	褐色	10YR4/4	砂層 細粒砂主体。褐色粘土の中ブロックやや多く含む
9	褐色	10YR4/4	砂層 細粒砂主体。黒褐色粘土粒・酸化鉄ブロックを多量含む
10	黒褐色	10YR3/2	砂質シルト 黄褐色粘土の中ブロックを多量、褐色中粒砂を少量含む
11	褐色	10YR4/4	砂層 細粒砂主体。暗褐色粘土粒を微量含む
12	暗褐色	10YR3/3	砂層 中粒砂主体。褐色粘土塊をやや多く、黒色粘土粒を少量含む
13	暗褐色	10YR3/3	砂層 細粒～中粒砂。褐色粘土の中ブロックを少量含む
14	黒色	10YR2/1	粘土 分解が進んだ植物遺体をやや多く含む。湿地性堆積

第19図 第12地点土層断面図



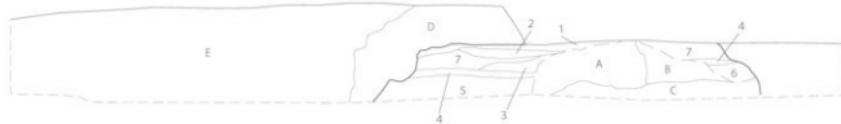
写真24 第12地点の堤防断面（南西から）

m. 第 13 地点

調査日：平成 28 年 2 月 16 日

特記事項

- ・ 調査着手以前に、昭和 40 年代の堤防築堤土の上部、および南側の一部をすでに掘削。このため調査時には中位から下位に存在していた 1 ~ 7 層を確認。
- ・ 旧堤防築堤土の可能性がある層序は一切確認できず。昭和 40 年代の工事の際にすべて削平された可能性がある。
- ・ A ~ C 層は既設の樋管工事に伴う埋土、D・E 層は今回の工事に伴う盛土である。



層 No.	土 色	土 質	特 殊 性
1	褐色	10YR4/4	砂層 細粒砂主体。砂利・灰黄褐色粘土の小ブロックを少量含む
2	明黄褐色	2, 5Y6/6	砂質シルト 山砂・黒色粘土小塊を少量含む
3	暗褐色	10YR3/3	砂層 細粒砂主体。灰黄褐色粘土の中ブロックをやや多く含む。しまり強い
4	オリーブ黒色	5Y3/2	シルト しまり極めて強い。上位には酸化鉄が集積
5	褐色	10Y4/4	砂層 細粒砂主体。灰黄褐色粘土の中ブロックを少量含む
6	褐色	10Y4/4	砂層 微粒砂主体。黒色粘土の小ブロックを微量含む
7	暗褐色	10Y3/3	砂質シルト しまり強い。黒色粘土・人頭大の礫を少量含む
A	褐色	10Y4/4	砂層 コンクリート片・礫・黒色粘土小塊をやや多く含む
B	暗褐色	10YR3/3	粘質シルト コンクリート片・礫・黒色粘土小塊をやや多く含む
C	オリーブ黒色	5Y2/2	粘質シルト コンクリート片・礫・黒色粘土小塊をやや多く含む

第 20 図 第 13 地点土層断面図



写真 25 第 13 地点の堤防断面（東から）

第V章　まとめ

今回の調査では、残念ながら旧堤防の構築時期を明確に示す遺物は未発見であった。しかしながら、現在の堤防以前の大規模な工事については、慶長年間の開削工事と、明治16～22年の全面改修があげられる。このうち明治期の改修工事は、宮城集治監に収監されていた多数の囚人が困難な工事に従事したことが当時の新聞報道等でも伝えられていることから、運河の大規模な拡幅が実施されたと考えられる。このため、今回調査を実施した石積護岸をはじめとした旧堤防築堤土については、現時点では明治期の拡幅工事に伴う土木痕跡と思われる。

また長谷金橋より南の区間の左岸では、貞山堀の代表的な景観となっている水面に映える松並木が存在しているが、昭和42年以降の「国営名取土地改良事業」で採抾された築堤方法は、この景観を維持するために旧堤防の上部から東側にかけて厚く貼り増しを行うという、当時としては最大限の努力をもって計画策定・施工したことが、土層観察という考古学的な調査で明瞭に把握できたことは特筆される事柄である。

松並木の一部については、東日本大震災の津波による影響で枯死したものもあるが、先人たちにも劣らぬ保全に向けての努力が結実しつつある。災害に耐えうる現代工学と、文化的景観の維持が見事に融合した、新しい「貞山堀」として再生することを期待したい。

【引用・参考文献】

- 岩沼市 1984 『岩沼市史』 岩沼市史編纂委員会
- 岩沼市 2011 『岩沼市復興計画マスターplan』
- 岩沼市教育委員会 2016 『東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書IV』
岩沼市文化財調査報告書第15集
- 遠藤剛人 1989 『貞山・北上運河沿革考』
- 菅野正道 2014 「第四章仙台城下建設の水の道」『イグネのある村へ 仙台平野における近世村落の成立』よみがえるふるさとの歴史3 蕃山房
- 佐藤昭典 2007 『利水・水運の都 仙台』国宝大崎八幡宮 仙台・江戸学叢書2
- 佐藤昭典 2015 『慶長大津波と運河 仙台湾岸 貞山運河のうち木引堀物語 その謎多き運河史』
- 東北農政局名取川農業水利事業所 1986 『なとりがわ』
- 馬場俊介 2014 『近世以前の土木・産業遺産』
- 三原良吉 1976 『貞山堀運河』宮城県文化財調査報告書第43集
- 宮城県土地改良史編纂委員会 1994 『宮城県土地改良史』 宮城県
- 宮城県土木部 2013 『貞山運河再生・復興ビジョン』
- 渡辺信夫 1994 「木曳堀・御舟入堀の開削をめぐって」『市史せんだい』vol.4 仙台市



写真 26 被災前の新浜水門付近の風景（平成 17 年 11 月 1 日撮影・南から）



写真 27 護岸工事開始前の調査地付近
(平成 25 年 5 月 9 日撮影・南から)



写真 28 第 1 地点の調査風景（西から）



写真 29 第 1 地点調査区全景（北から）



写真 30 新浜水門周辺（南から）



写真 31 被災後の新浜橋北側の風景

(平成 23 年 4 月 13 日撮影・南から)



写真 32 護岸工事開始前の調査地付近

(平成 24 年 11 月 7 日撮影・南西から)



写真 33 新浜橋北側周辺（南から）



写真 34 第 2 地点調査風景（南から）



写真 35 第 2 地点の土層断面（南から）



写真 36 護岸工事開始前の調査地付近
(平成 25 年 5 月 9 日撮影・南から)



写真 37 第 3 地点全景（南から）



写真 38 第 3 地点の調査風景（南から）



写真 39 被災前の蒲崎橋周辺の風景
(平成 20 年 6 月 24 日撮影・北から)



写真 40 護岸工事開始前の調査地付近
(平成 24 年 11 月 7 日撮影・北西から)



写真 41 第 4 地点全景（北西から）



写真 42 蒲崎橋南側周辺（北から）



写真 43 被災前の寺島橋南側
(平成 20 年 6 月 24 日撮影・北から)



写真 44 被災直後の寺島橋南側
(平成 23 年 3 月 22 日撮影・北から)



写真 45 第 5 地点全景（東から）



写真 46 寺島橋南側（北から）

写真47 被災前の寺島橋北側
(平成23年2月21日撮影・南から)



写真48 被災直後の寺島橋北側 (平成23年3月22日撮影・南から)



写真49 第6地点掘削風景 (東から)



写真50 第6地点の土層断面 (北から)



写真 51 護岸工事開始前の調査地
(北から)



写真 52 寺島橋北側（南から）



写真 53 第7地点掘削風景（東から）



写真 54 第7地点の土層断面（南東から）

写真 55 被災前の長谷釜橋南側
(平成 17 年 11 月 21 日撮影・北から)



写真 56 第8地点掘削風景 (南東から)



写真 57 第8地点調査風景 (南から)



写真 58 長谷釜橋南側 (北から)



写真 59 被災直後の長谷釜橋南側（平成 23 年 3 月 22 日撮影・北から）



写真 60 護岸工事開始前の調査地付近
(平成 24 年 11 月 7 日撮影・北から)



写真 61 第 9 地点掘削風景（南から）



写真 62 第 9 地点の調査風景（南から）



写真 63 被災直後の二野倉橋南側（平成 23 年 3 月 22 日撮影・南から）



写真 64 護岸工事開始前の調査地付近
(平成 24 年 11 月 7 日撮影・南から)



写真 65 第 10 地点掘削風景（南から）



写真 66 第 10 地点の土層断面（南東から）



写真 67 二野倉橋北側（南から）



写真 68 第 11 地点掘削風景（南から）



写真 69 第 11 地点の土層断面
(北西から)

写真 70 被災直後の藤曾根地区
(平成 23 年 3 月 22 日撮影・南から)



写真 71 赤井橋南側（北から）



写真 72 第 12 地点掘削風景（東から）



写真 73 第 12 地点の土層断面（南東から）



写真 74 赤井橋北側（南東から）



写真 75 第 13 地点の調査前風景
(東から)



写真 76 第 13 地点の調査風景
(南から)

報告書抄録

ふりがな	ていざんぱりはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	貞山堀発掘調査報告書						
副書名	五間堀川災害復旧事業に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第 17 集						
編集者名	川又隆央・熊谷篤						
編集機関	岩沼市教育委員会						
所在地	〒 989-2480 宮城県岩沼市桜 1 丁目 6 - 20 TEL(0223) - 22 - 1111						
発行年月日	西暦 2017 年 2 月 28 日						
(ふりがな) 所収遺跡	(ふりがな) 所在地	市町村コード	北緯 東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
貞山堀	岩沼市 寺島 地内外	042111	15045 38° 04' 19"	140° 55' 17"	20150203 ~ 20161212	150 m ²	五間堀川災害復旧 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
貞山堀	運河	近世・近代	石積護岸・ 堤防構築土	なし	貞山堀の市域内区間を、考古学的手法によって初めて調査。顧在する堤防に先行する時期の、旧堤防構築土と思われる堆積層を確認している。これらは、昭和 42 年(1967)から同 60 年(1986)に行われた「国営名取土地改良事業」による護岸工事以前のものであり、現時点では明治期の拡張工事に伴う土木痕跡と思われる。		
要約	近世初期に開削されたと考えられる貞山堀のうち、謹崎橋より南側の東岸の一部では、市内で唯一の石積護岸施設が顧在していた。この石積護岸部分の発掘調査を実施したところ、残存する堤防に先行する時期の堤防構築土が残されていることが明らかとなつた。また、種管を敷設する各地点においても調査を実施し、旧堤防の築堤土と思われる堆積層を確認している。これらは、昭和 42 年(1967)から同 60 年(1986)に行われた「国営名取土地改良事業」による護岸工事以前のものであり、現時点では明治期の拡張工事に伴う土木痕跡と思われる。						

岩沼市文化財調査報告書第17集
貞山堀発掘調査報告書
—五間堀川災害復旧事業に伴う発掘調査報告書—
平成29年2月
発行 岩沼市教育委員会
岩沼市桜1丁目6番20号
生涯学習課 TEL0225(23)1111 内線573
印刷 川口印刷工業株式会社仙台支店
仙台市青葉区中央4丁目7-17
TEL022(712)9776